綾瀬川と藤助河岸

平成16年10月31日
大裁ギャラリーひろば

高橋正澄

56年生

追想二題

元蒲生小学校校長
高橋正澄氏の
蒲生

1 曽祖母のこと

私は、現在、一里塚下の畑で野菜作りの真似ごとをしている。

多分、歳のせいかもしれない。最近、一里塚周辺の四季や家並みの変貌ぶりを眺めていると、少年の頃過した綾瀬川や巨光街道本屋通りの風景、そして、人々との人情の触れ合いが懐しく思われてならない。

私が、少年の頃（昭和十三年小学校入学）出羽郷を挟んで目の前、蒲生大橋の袂に、目の不自由な曽祖母が住んでいた。

そのため私は、年に何度か遊びに来た祖母の手を引いて、例の住いまで送って行った。時には塔印、愛石様（一里塚）まで足をのばして長いお祈りを待つこともあった。

家まで送ると、決まって「駄賃」といって、五銭、それに、少々の菓子を添えてくれた。

そんな曽祖母と、道中、何を話したかは、よく覚えていない。が、たった、一言「子供の頃は、夜が物凄くおっかなかった。」と語ったことだけは、妙に脳裏にこびり付いている。

そんな曽祖母も、私が小学校四年生（昭和十六年）の時、九十歳で亡くなった。

故郷が、庭先の水仙の花を摘んできて、棺の中に手向けたのを覚えている。

今、考え通算してみると、曽祖母は、嘉永年間に生まれ、子供の時代から幕藩時代を経て末の動乱期に過したことになる。

曽祖母は、御墓を行く人々の風体や言動から風雲を告げ世の変動を自分の目で見、耳で聞いているのである。

暗い行灯の光に身を寄せ、怯えて夜を過した心境「……おっかなかった。」が、なんとなく分かるような気がする。

2 綾瀬川のこと

あの曽祖母の皺だらけの手に、溢れる歴史から明治、大正、昭和へと生きぬいた逞しい血が流れていたかと思うと、感慨もまた無量である。

現在、水質汚濁で悪名高き綾瀬川も、私の少年時代はまだ綺麗だった。

川岸近くには、エビモ、キンギョモ等が繁茂し、藻刈り舟が出るほどだった。また、川端に仕掛けられた筌（ウケ）にも、キラキラと光る小魚の姿が見えた。

こんな綾瀬川は、夏、子供等にとって格好の遊園と化し、そして子供等を育てた。

水浴びに魚釣り、川辺の徒歩と……。

なかでも、流れ寄る大きな藻塊に乗って、顔を天に向けての川下りは痛快だった。

そして、秋から冬、綾瀬川と出羽堀の合流点辺では、投網打ちの姿が見られた。

小舟の舳先に立ち、竿さばきよろしく、スーッと網に近ずいては網を打つ。私は、漁夫のその機敏な動きが大好きだった。

ところで、私が育った綾瀬河岸であるが、もう、その頃水運の業務はなかった。

だが、水運が全く消滅したわけではない。曲頭の持ち舟による水運はあった。主として、薪炭品や砂、下肥等の輸送だったようである。

何度か松原付近を北上する帆かけ舟を見かけたこともある。のどかな風景だった。

私が、五歳の時だったと思う。周辺の大人達と、川岸から出る舟で成田の川開きを見物したことがある。可愛らしい花火は覚えていないが、サイダーをたらふく飲んだことだけは覚えている。まことに情けない話である。

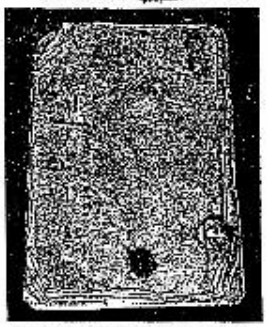
これが私にとって、最初で最後、一泊二日の舟旅であった。

そんな綾瀬川が懐しく、本年九月、待望の一級河川綾瀬川の起点、柳川市小針一四五九番地に立った。そこは、幅一メートルをこえ、草の生えた、なんの変哲もない排水路に等しい川で、ある種の落胆を覚えた。

まちの話題

見えてますか？素晴らしい蒲生（二）

蒲生小博物館です。



▲明治37年度の學資簿（通信簿）

明治六年、蒲生及び登戸西村（明治十七年瓦曽根村も学区に併合）を一学区として、「蒲生学校」が開設され、平成元年三月第百四卒業記念を迎え、後、平成三年校舎改修工事竣工を記念し空き教室利用の「蒲生小博物館」が開設されました。展示品としては、歴史的な教材、教具、学業アルバム、教育資料、写真、機具、特に郷土では見られない明治の頃の通信簿は貴重な資料です。水路のなつかしい母校の写真等も地域の方々の御協力により見やすく陳列されています。おひまをみて、ぜひご見学を。

綾瀬川の昔と今

① あやし川

○大雨ごとに川筋を変えていたための説がある。

○文明18年(1486)道興准后の「廻国雑記」に「あやしの橋」という処にて」として、『川かせの渡る霧まにほのみえて あやしの橋の末ぞあやしき』という歌が記されている。
次に「岩つきといへる所を過ぎるに…」とあるので、岩槻と流れる綾瀬川に違いない。(埼玉東部今昔物語)

○元禄16年(1703)水野長福の「結城使行」の中で、…川あるによって、何川ぞと問せけるに、大河と申すいふに、壱人はあやし川といふ。又壱人はあやせ川とも答う。長福は、この地(草加)で『驚いかに、氷の隙をあやし川』と一句、詠んでいる
(越谷市史)

② 綾瀬川は大河であった。

○近世以前、綾瀬川は元荒川同様、荒川の本流をなしたことがあった。

○綾瀬川は乱流であったため、流域に多くの沼や湿地帯をつくった。

○近世以前には、大型舟が運行していた。
「大型舟埋没伝説」(草加青柳町)
「帆柱発掘伝説」(草加稲荷町)

○昭和4年綾瀬川、草加金明町側の川底から縄文後期の丸木舟が発掘された。(草加市史) 写真1

③ 綾瀬川は清流であった

○綾瀬川の水は茶の湯として珍重された。江守奈比古著の「お茶の話」には、急流の宇治川の橋柱の3つ目から汲めとか関東なら綾瀬川の渦をまいた場所で汲めとか、昔から定められていたとのこと (草加市史研究)

○享保18年(1733)加藤敬貴の「本所西国やどり」の中に「綾瀬川というあり、錦藻という浮草あり、浮草の波うねうね成る様子は小野小町の歌が思い出される。これには及ばぬが、綾瀬川を詠んでみた。「ゆく水の波織りかくる綾瀬川、川の名知る見ゆる錦藻」(越谷の歴史)

○文化年中(1804~30)秋大淨の「遊歴雑記」の中に、「川の両岸に小さな赤ガニが群をなして、岸の穴を出入りしているのが印象的…」と記している(越谷の歴史)

○江戸の粋人の間では、綾瀬川の流域は雪の名所として人気があった。(江戸名所百選)

④ 綾瀬川の改修 ---(埼玉東部今昔物語、越谷、草加市史)

○慶長年中(1596~1614)荒川(現元荒川)の綾瀬川分流口に伊奈備前守忠次は堤を築き、荒川と綾瀬川を分離し、低地綾瀬川流域の新田開発を図った。この堤を備前堤と称している。 写真2.3

○ 元禄2年(1689) 備前堰を開削し、元荒川と綾瀬川の水量の調節を図った。この堰を備前堰と称している。

○ 現在は改修により、綾瀬川と元荒川が完全に分離されている。

○ 綾瀬川の源流は赤堀川の余水を流していたが今は、ほとんど流れていない。従って綾瀬川の源流ではなく綾瀬川の起点と称されている。(現 桶川市小針 1459 番地)…写真4

○ 寛永6年(1629) 荒川は熊谷の石原で締切られ、入間川筋に付け替えられため、元の荒川は元荒川と称されるようになり水量も激減した。

○ そのため元荒川や綾瀬川の沼沢地は干拓され新田の開発が促進された。

○ 寛永7年 蒲生(現藤助河岸)前より篠葉などを迂回して谷古宇に流れていた屈曲流を直線の流路に改修した。(草加松並木通り) 元の曲流路は古綾瀬川と称した。写真5,6 図7,8

○ 槐戸村(現草加市八幡町) 新編武蔵風土記稿

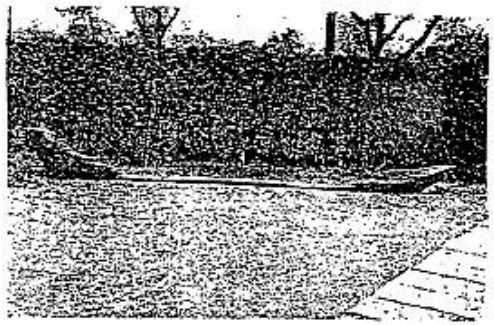
> 村の北より東に屈曲して流れている此の川、ややもすれば水たたえ溢るるを以て寛永年中、鎮によりて、今の新綾瀬川を掘開られし故、今は川幅8間に過ぎず"という。

○ 寛永7年 柳島(八潮市)～西袋(八潮市) 浮塚～小菅 直流に改修する

○ 延宝8年(1680) 小菅より隅田村まで開削を延長、淀川(隅田川)に接続するとともに、川筋の堰止め厳禁、直流用の網代、柵杭禁止となる。

○ 平成3年綾瀬川拡幅工事終了、このため蒲生下茶屋通り33軒(300年間)移動する また、旧光街道寸断する。図9 10

1



綾瀬川から出土した丸木舟

草加市史「自然考古編」より

2

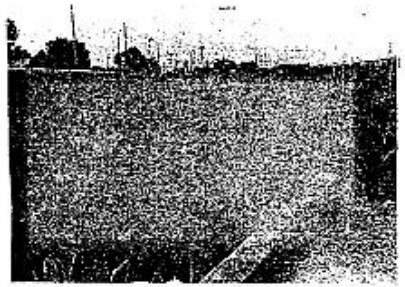
綾瀬川略図(埼玉東部今昔物語)

3

五丁台の備前堰

(埼玉東部今昔物語)

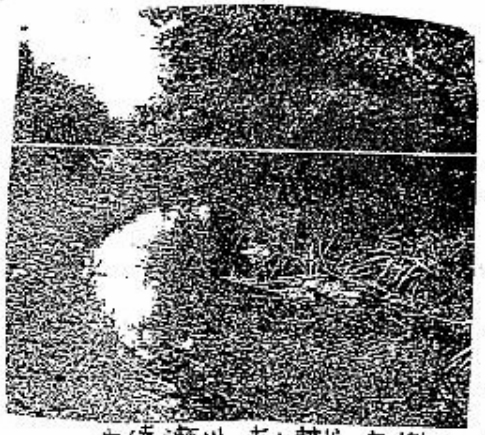
4



綾瀬川の源流

(埼玉東部今昔物語)

5



古綾瀬川　左 越谷　右 草加
（埼玉東部今昔物語）

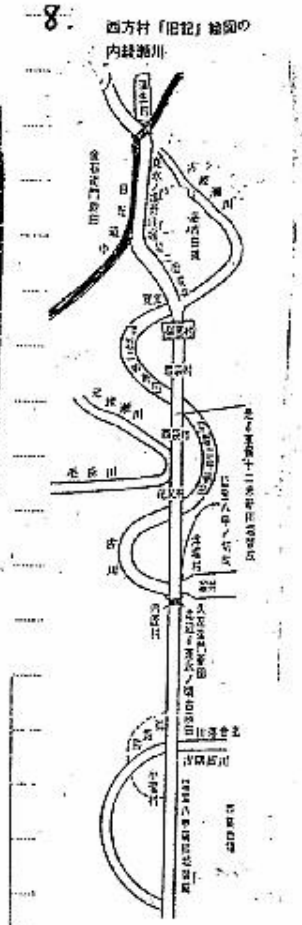
6

草加の新綾瀬川（昭50）
（埼玉東部今昔物語）

7

谷古田領古綾瀬川
（埼玉東部今昔物語）

8.



草加市史研究 5.5
西川清村氏
「河川流水の沿革概略」より

藤助河岸

○ たび重なる綾瀬川の改修工事、とりわけ延宝8年の工事により、江戸との直通の通運が可能になり、川岸には多くの河岸ができた。

○ 江戸期 越谷蒲生では米七河岸が隆盛を極めようである。明治に入り、特に伝馬制度の廃止や瓦曽根河岸の舟運行の困難から地の利を得た藤助河岸が繁栄した。往時には荷舟10艘（長舟高瀬舟）伝馬舟10艘川下小舟19艘を備えていた。（80石 50石、20石）

○ 草加市史研究会の調べによると藤助河岸の先祖は、蒲生地蔵院に刻まれている戒名「長道了安信士」（名不詳）の寂年が享保7年（1722）であろうと推察している。
このことから 20年前の元禄、その先の貞享また天和の時代に創業したとも考えられる。
越谷市史では元禄創業と、とらえているが、創業の時期は定かでない。

○ 同研究の「日光道中宿村大概帳」天保14年（1843）調べによると

九左衛門、金右衛門新田、蒲生村綾瀬川河岸へ積み出し、それより江戸迄川路5里　（蒲生河岸）

とある。綾瀬川や蒲生河岸が藤助河岸である確証はないが、明治26年創業の千住馬車鉄道の停車駅に現藤助河岸を蒲生村河岸と記している。

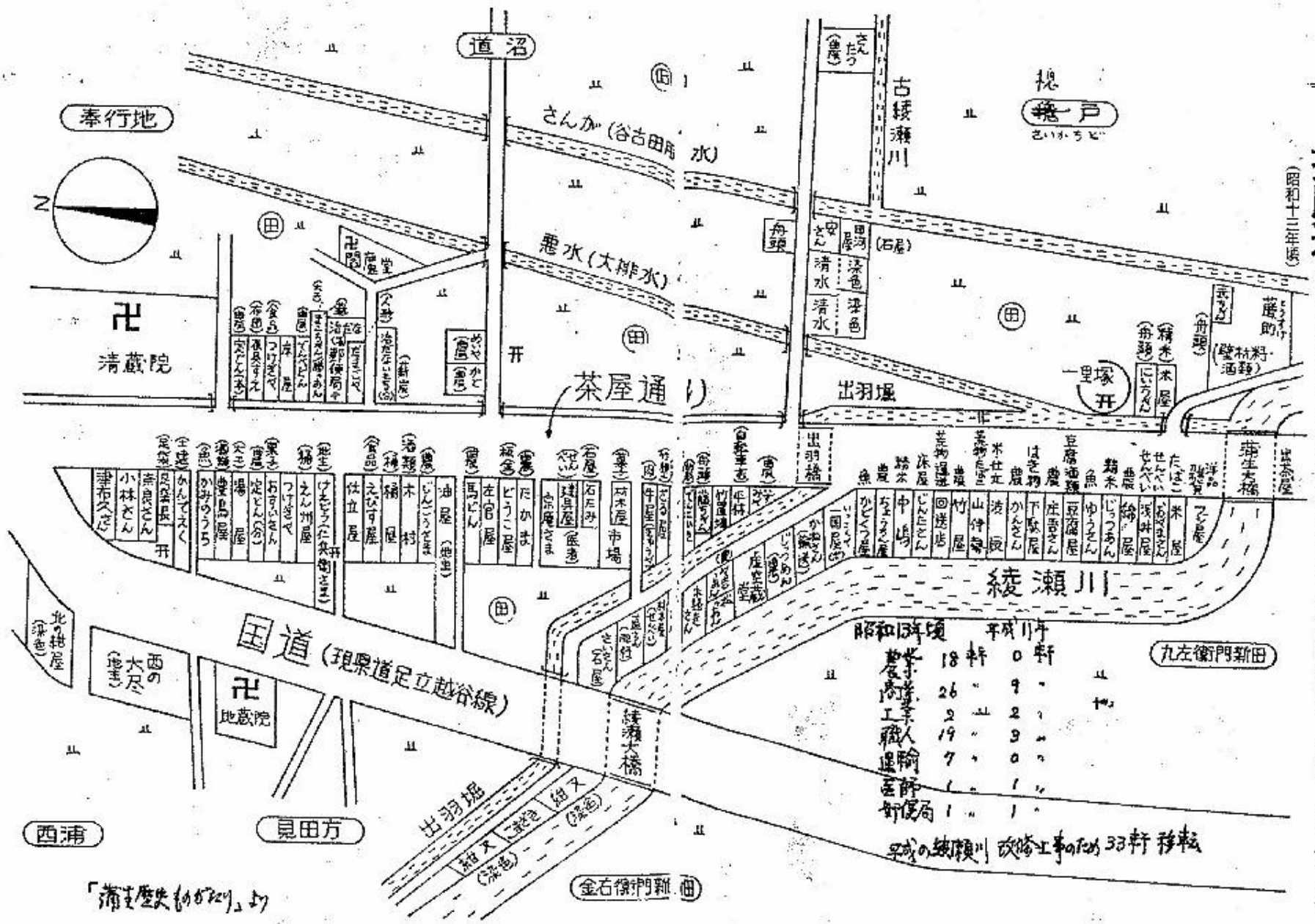
このことから綾瀬川河岸、蒲生河岸は、現の藤助河岸を指していると考えられる。 写真 11、12、13

9
一里塚
出羽道
人家
寺堂
亡所
川堀
田畑
道
村境
右絵図西之通相違無之
明治五壬申年一月
埼玉縣

茶屋通り（現蒲生二丁目～蒲生三丁目～蒲生愛宕町近辺）

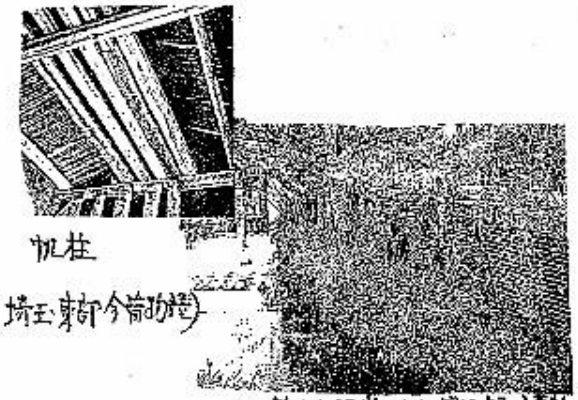
（昭和十三年頃）

元図――高橋正澄



「蒲生歴史ものがたり」より

11 ○江戸期から明治43年までの藤助河岸は日光道中蒲生大橋の端にあった

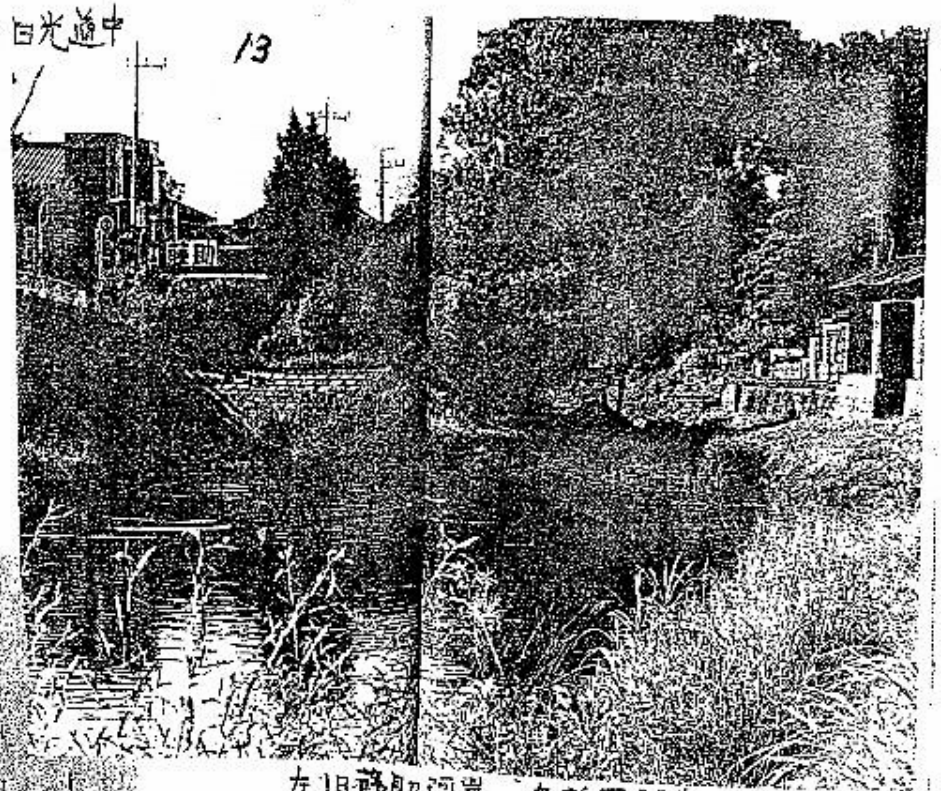


帆柱

(埼玉東部今昔物語)

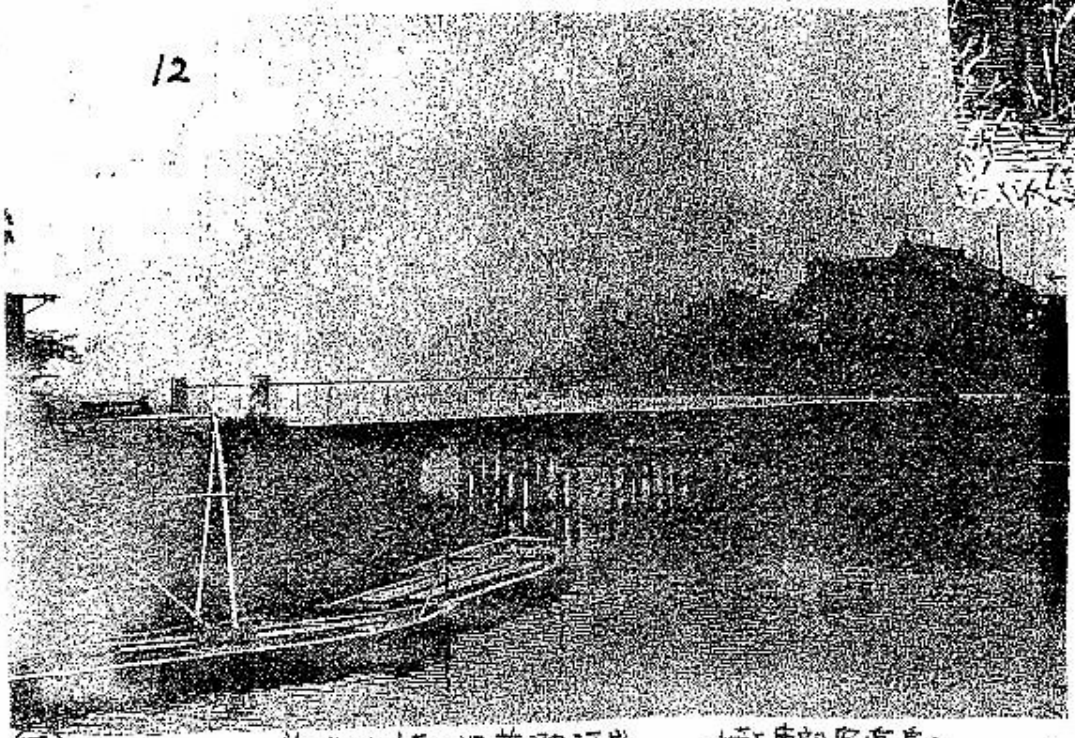
旧藤助河岸 レンガによる護岸 左水門塀

13

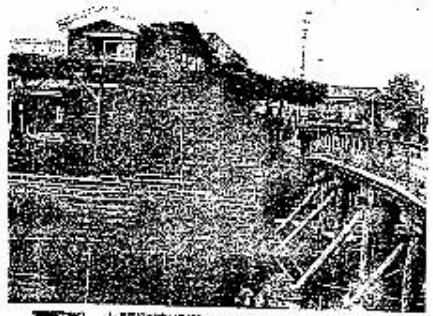


左旧藤助河岸 右新藤河岸 (越谷市教育委員会)

12

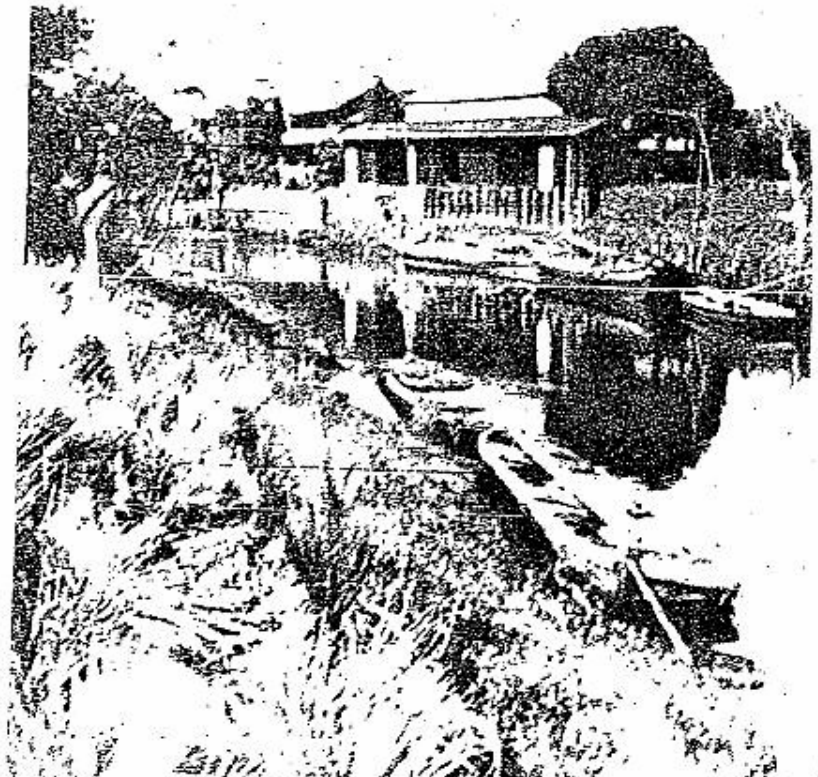


蒲生大橋と旧藤助河岸 (河江東部写真集)



大間野綾瀬川のよしずや河岸跡 (昭60)

(埼玉東部今昔物語)



昭和10年代の藤助河岸（越谷市教育委員会提供）

綾瀬川沿いの新田との境にある舟便による河岸で、江戸時代の中期頃に創立され隆盛をみた。鉄道の普及等で廃止されてゆく河岸場のなかで、なお繁昌した綾瀬川舟運では唯一の河岸場であった。それは越ケ谷町等の荷との荷が東武鉄道を利用せずに、藤助河岸から東京方面に送られていたからである。

ことに同河岸は大正二年四月、資本金五万円の株式会社となり、以後武蔵水陸運輸会社といわれ、陸上運送や倉庫の貸付業務等も取扱うようになった。舟運の品物は岩槻町の白木綿、鼓張地（かやぢ）、胡麻油、蔬菜類。粕壁町の硫酸類、醤油、味噌、米、麦、胡麻油。越ケ谷町の米穀類、わら縄、莚類、味噌等であり、年間の出荷高は、一万八〇〇〇余駄、着荷は二万駄以上に及んだという。（大正五年「越ケ谷案内」による）

以後、大正九年越ケ谷駅が設置され、越ケ谷の荷が東武鉄道便にとって変わり、次第に衰退の一途をたどり、昭和の初期には、事実上廃止され、現在、藤助河岸の経営者であった家は酒屋を営んでおり、着船時の積下し用の小岸は、復元されて現存している。

（蒲生歴史物語提供）

○祖母の話によると明治43年の関東大洪水の時、建築中であったとのこと。

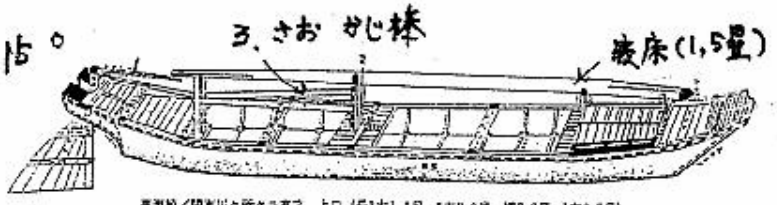
○藤助河岸は明治から大正にかけて隆盛と栄えた。 写真14

○東武鉄道が明治32年に開業するも、越ケ谷町などの商人との永年の取り引きによる信用、運賃は東武鉄道の1/3、馬車による店までの輸送などの利点から繁昌し大正2年4月資本金五万円の武陽水陸運輸会社を設立した。

○舟と馬車による連携による輸送、貨倉庫は大きな利益をあげた。年間出荷高18000余駄、着荷高20000余駄に及んだ。 図15

○最盛期には税金、寄付等も多額で村の名士になり、村会議員にも選出されている。田畑も10数町所有する地主でもあった。

15 ○



高瀬舟　（さいたま歴史街道）

○大正9年越ケ谷駅設置により東武鉄道と越ケ谷町とかわした約定(4)により、越ケ谷町商人等の取り引きがとだえたことが武陽水陸輸送会社の倒産につながった。 資料16

○その後規模を縮少し再起を図るも、負債が重なり昭和のはじめには倒産、メインバンク日産銀行により負債処理が行われ、全財産を失った。

越ヶ谷町の停車場誘致運動　明治三十二年の東武鉄道開通当初は、停車場の誘致に積極的でなかった越ヶ谷町も、その後商工業者を中心とした町民の間から、産業の興隆や町の発展には、交通運輸のかなめともいえる停車場の設置が必要であるとの要望が高まった。こうして大正八年五月、「当町ニ於ケル運輸交通ノ便益ノ増進ト経済的発達ヲ助長セント」（越ヶ谷停車場新設期成同盟会趣意書）の目的のもとに、越ヶ谷町長を会長とした町民有志による停車場新設期成同盟会が結成され、積極的な誘致運動がはじめられた。かくて東武鉄道との交渉が進められたが、その結果相互協議による停車場開設要項が示された。この要項は次のごとくである。

(1)停車場ノ位置及設計ハ東武鉄道株式会社ノ定ムル所ニ依ル事
(2)当町ハ金壱万六千円ヲ東武鉄道株式会社ニ寄附スル事
(3)当町ハ停車場開業前、国道ヨリ停車場ニ通スル幅四間以上ノ道路ヲ新設完成スル事
(4)当町ハ当町商工業連合、若シクハ商工業者ヲ相当事由アラサル限リ、全部東武鉄道株式会社ト貨物運送ノ契約ヲ締結セシメ、之レカ保証ノ責ニ任スル事
(5)東武鉄道株式会社ハ、可成速ニ停車場設置ニ関スル準備ヲ進メ、工事ニ着手シ営業ノ開始ヲ為スル事

（越谷市史）

○ 運が悪いときは、どうにもならない。大正12年の関東大震災の前年、林木置場の大半を焼失し、再起を遂した。

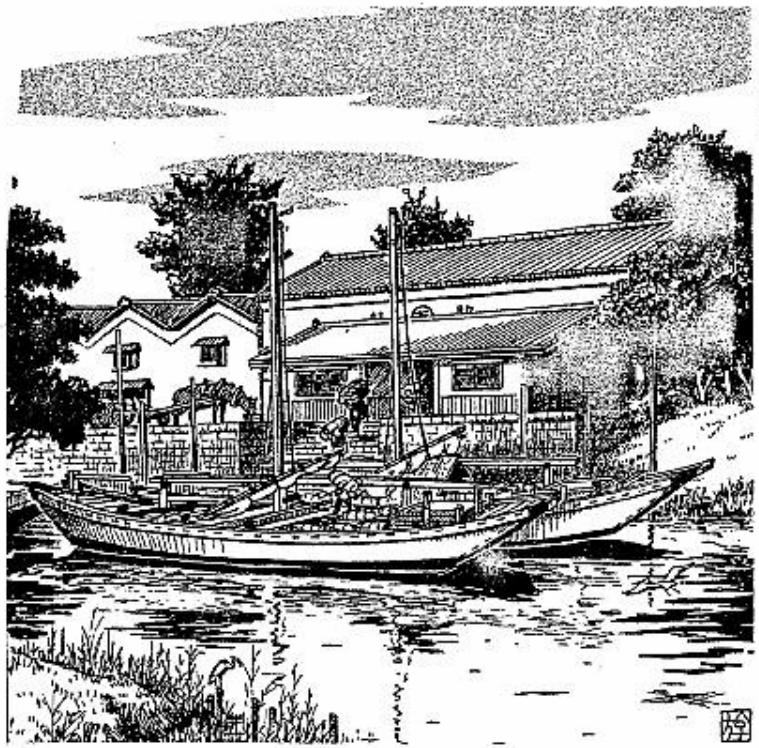
○ 倒産後、祖父は家を離れ、家は祖母が叔父、叔母が力を合わせ、家復興のため建材、食料品、倉庫業などを励み、暮しをたてた。

○ 戦後、叔父を戦争で失ったが、叔母があとを継ぎ、復興を果した。

○ 祖母、叔母、復興を見とどけて他界した。

往時の藤助河岸（想像画）
私のイメージにぴったり

藤助河岸（とうすけがし）



いつもそこには川があった
RIVER HISTORY

舟頭さんとの対話から

- 大潮（新月、満月）の日は干満の差が激しく、浅草蔵前まで6時間余で行けた。
- 100石、80石舟をあやつって神田川をさか上った。
- 昭和22年頃、隅田川の川底が見えた。
- 小菅の水門は難所であった。[illegible]
  そのため小菅の手前で差がなくなるまで待機することもあった。
- 舟頭の給金はよかった。普通サラリーマンの3倍になった。

●特集 川かわがく学のすすめ